

スロヴィンツ語のアクセント法について

ダツェンコ イーホル

キーワード アクセント理論 アクセントパラダイム 西スラヴ語群 スロヴィンツ語

はじめに

スロヴィンツ語 (Slovincian) のアクセントの詳しい研究は、スラヴ語派の韻律構造の発展に関する理解に役に立つ。しかしこの死語になった言語の詳細な研究はあまり積極的になされなかった。その主な原因の一つとして、これを詳細に記述した唯一の文法 (Lorentz 1903) が、あまりにも複雑な音声表記と独自の専門術語を用いていることによって、研究者には近づきがたかったことが挙げられよう。本論ではこの言語のアクセント特徴 (特にアクセントパラダイム) をスラヴ祖語のそれと比較し、スロヴィンツ語のアクセントパラダイム *b* の語はこの言語の二次的な発達であることを示した。

1. スロヴィンツ語の状態

スロヴィンツ語は、ポーランドのバルト海沿岸の一地域で用いられていた。第二次世界大戦以前はドイツの西プロイセンに属していた。スロヴィンツの住民はバルト海やウェブスコ湖やガルドノ湖で漁をし、Kluki という村がスロヴィンツ人の拠点の一つであった。現代その地方はスロヴィンツ国立公園とスロヴィンツ野外博物館になっている。

西スラヴ語群に属するスロヴィンツ語は、20世紀半ばに死語になった。スロヴィンツ語は、ポーランド語・カシューブ語 (Kashubian)・ポラーブ語 (Polabian) とともにレヒト諸語 (the Lechitic group) を構成する。しかし、スロヴィンツ語がレヒト諸語の中のどの言語に帰属するかについては、一部の言語学者から疑問視されている。Дуличенко (2005) によれば、スロヴィンツ語はカシューブ語の方言のひとつと見られている。この言語の最初の、そして最大の研究者の一人である F. Lorentz は、スロヴィンツ語はカシューブ語から分離している言語だと述べている (Lorentz 1903: 8-10)。しかし、Lorentz は、後の論文では、スロヴィンツ語をカシューブ語の多数の方言のひとつだと考えている (Lorentz 1927:

15). J. Mikkola (1899: 43-58) と Д. Бубрих (1924: 8-9) もこれと同意見である。さらに学術文献では、カシューブ語とスロヴィンツ語を示すために「ポメラニア語」という用語も使われてもいる。例えば、А. Гильфердинг (1859)、S. Ramult (1893)、Lorentz (1925, 1927) がこの用語を使っている。

2. スロヴィンツ語のアクセントの性質

アクセントに関してスロヴィンツ語は、カシューブ語方言だけではなく、他の西スラヴ語群の言語に対立する。スロヴィンツ語の大きな特徴は、他の西スラヴ語が固定アクセントであるのに対して、この言語が移動アクセントをもつことである。もう一つの大きな特徴は、この言語は音調 *ton* を有することである（他の西スラヴ語にはこの特徴はない）。したがって、スロヴィンツ語はピッチアクセント (*pitch accent*) 言語の一つであった。このピッチアクセントは、現代スラヴ語の中の南スラヴ語群、即ち、スロベニア語、セルビア語、クロアチア語が保存したものと同種のものである。これらの諸言語と同様にスロヴィンツ語は各音節で強勢アクセントだけではなく、高低アクセントも見つかる。Lorentz (1903: 168) によれば、意味の分別機能にとって、強勢アクセントが音調より重要だという。

スロヴィンツ語の音調には、「アキュート」と「引き伸ばし音調」の二つの種類がある。アキュート (*scharfer Ton*) は Lorentz によれば、落ちるアクセントと指定される。長母音のアキュートは、Lorentz によれば、低地ドイツ語の *hūs, gōs* やリトアニア語のアキュート(リトアニア語の *acute* は下降音調を特徴とする) に比較される。¹ Lorentz (1903: 169) によれば、アキュートの発音は以下のような：声は最初から張力がある。音調は最初に上げて、少しづつ下がる。音節末に流音や鼻音や[v]がある場合、その音声は母音と同様の音調を有する。本来の長音[ā], [é], [ī], [ó], [ú] や[ai], [au]の二重母音、本来の短音 ы, ь 由来の [ei], [eu] の二重母音にはアキュートをもつことができる。

引き伸ばし音調 (*dehnender Ton*) は強勢に関して二つの頂点の内、第1番目の頂点は第2番目の頂点より強い。Lorentz (1903: 169) によれば、アクセントの強さは最初に現れて、少し衰えて、それから増す、とされる。音調に関しては、このアクセントの前頂点は後頂点より高い。Lorentz は、リトアニア語の *circumflex* 音調(上昇音調)や低地ドイツ語の *gōs, müs* とは比較できないと断言している。引き伸ばし音調は音節末の子音だけではなく、次の音節の最初の子音も前の音節の音調の影響を受けるということが、アキュートと異なる。「アキュート」と「引き伸ばし音調」は以下の図式により示すことができる。



恐らく、スラヴ祖語との母音の量の関連から導き出された、上のアクセント特徴は、学者らによって次のような母音の「階梯 Stufe」特徴によって特徴づけられている。Mikkola は、母音の性質によって、アキュートと引き伸ばし音調の使用には法則があると見做した：アキュートは長母音の特徴を、引き伸ばし音調は短母音の特徴をもつ。Mikkola (1899: 45) は、これをスロヴィンツ語におけるアブラウトの「上昇 (gesteigert)」と「中立 (indifferent)」の階梯と呼んでいる。他方、Lorentz (1903:35) はその母音を「長音階梯 (Langstufenvokal)」と「短音階梯 (Kurzstufenvokal)」と呼び、「スロヴィンツ語の最初の発達の際に、スラブ祖語の各母音は量的な本質を特徴とした。つまり長音や短音などであった。後に量的な区別は質的な区別に発展した」と述べている」(Lorentz 1903:35)。東スラヴ語群及び南スラヴ語群と違って、西スラヴ語群は固定アクセントを特徴としている。つまり、チェコ語やスロヴァキア語やソルブ語などは語頭アクセント、ポーランド語は次末音節アクセントを特徴としている。スロヴィンツ語以外では、カシューブ語の方言には、語頭アクセント又は語末音節アクセントがある (Дуличенко2005: 389)。チェコ語はスラヴ祖語の音調に関係する。ここでは、古代の circumflex は短母音として反映される。Acute の痕跡は長音として現れる。例：Cz. *rána* (怪我)、*síla* (力)、cf. što 方言 *ràna*, *síla*, Cz. *chvála* (賞賛), cf. R. *хва́ла*。スロヴァキア語では、acute が短母音として現れる (Sl. *rana*, *síla*, *dym*, *klin*)。西スラヴ語における固定アクセントの発展は、母音伸長のためのアクセントパラダイムの再分配に関係があるように思われる。その母音伸長は弱化母音の消失のために起こった。レヒト語の長音は古代ポーランド語 (14-16 世紀) の写本に記録されており、古代ポーランド語ではスラヴ祖語の移動アクセントが保存された (Булаховский 1983: 13-14)。アクセントを示すために Lorentz (1903: 15) は以下の記号を用いる。

1. ^ アキュートの 3 モーラの超長音。例：*řékā́, šībā́*。
2. ´ アキュートの 2 モーラの長音。例：*řék, ríb*。
3. ~ 引き伸ばし音調の 2 モーラの長音。例：*lāvā, stānā*。
4. ˘ アキュートの 1 モーラの短音。例：*ščě, darě*。
5. ˘ 引き伸ばし音調の 1 モーラの短音。例：*vě, lā*。

6. “ 副次的なアクセント。例：~~na~~ *smānāuscā, nāpēstavnīšī* 。

3. スラヴ祖語のアクセントパラダイム

印欧祖語アクセントから発展されたスラヴ祖語のアクセント体系は3つのアクセントパラダイム (accent paradigm, 略して a.p.、ロシア語では *акцентная парадигма* 略して a. п.) からなっている。A.p. *a* は語根固定アクセント、a.p. *b* は語尾固定アクセントを特徴としている。A.p. *c* のアクセントは、パラダイム内の中でアクセントが語幹と語尾の間を移動する。スラヴ語の \bar{a} -語根の女性名詞の各アクセントパラダイムは、以下の現代ロシア語の名詞のアクセントに対応している。

	A.p. <i>a</i>	A.p. <i>b</i>	A.п. <i>c</i>
主格	корóва	женá	рукá
属格	корóвы	жены́	рукí
与格	корóве	женé	(рукé)
対格	корóву	жену́	руку́
具格	корóвой	женой́	рукой́
位格	корóве	женé	рукé

スラヴ祖語のアクセントパラダイムは、アクセントの位置だけではなく、音調の性格も特徴としていた。A.p. *a* には *acute* 語根、a.p. *b* には *neo-acute* またはアクセントを受け取らない語幹を特徴とする。A.p. *c* は語幹に *circumflex* を特徴とする。スラヴ語においては、Meillet 法則によって移動アクセントパラダイムの語は全て *circumflex* を特徴とする (cf. Lith. *galvà* (AP3), Russ. *golová, gólovu*)。スラヴ祖語から相続した音調体系は現代南スラヴ語、つまりセルビア語やクロアチア語やスロベニア語などに保存されている。A.p. *c* の特徴は、後接語 *proclitic* が音節を持てば、アクセントがこの上に後退する(「後退アクセント (recessive accent)」とはアクセント論では語頭に向かってアクセントが移動するアクセントをいう)。例えば: Russ. *ná golovu* 。

4. スロヴィンツ語のアクセントパラダイム

4. 1. アクセントパラダイム *a*

スロヴィンツ語の a.p. *a* は以下の単語により示すことが出来る:

単 数	主格	χlùep (男性)	áupā (サル)	複数	主格	χlùepjī, -pā	áupā
	属格	χlùepā	áupā, -pā		属格	χlùep, -pou	áupou
	与格	χlùepú, -pojú	áupjā, -pojú		与格	χlùepoum	áupoum
	対格	χlùepā	áupa		対格	χlùepou	áupā
	具格	χlùepa	áupou, -pa		具格	χlùepī, -pmī, -pamī	áupamī, -pmī
	位格	χlùepjā	áupjā		位格	χlùepjēχ, -pāχ	áupāχ
	呼格	χlùepjā	áupjā	双 数 形	主格	χlùepā	áupā
					与格	χlùepomā	áupomā
					具格		

アクセントを有する例 : *bík, čvjérč, dāχ, ftāyχ, grēχ, γlíd, hūbēl, χlév, klín, lūtēr, mjístr, pādēl, ríš, smárz, tróyd, hīl, vjērχ, zbóyn*。また、ときには引き伸ばし音調を有する単語もある : *brāt, dējšč, kāšēl, rēok, vjātēr*。女性名詞は引き伸ばし音調を受ける : *bābā, cērā, dējzā, gābā, jīybā, nīvā, skāla, vjārā, zdrādā*。アクセントを有する女性名詞は少数である : *kvártā, χvjīlā, vīnā*。

4. 2. アクセントパラダイム b

スラヴ祖語の a. p. b は、本来的に語根固定アクセントの単語における non-acute 音調を有する語幹末母音から次の音節にアクセントが推移して生じたパラダイムである。その現象は Dybo の法則として知られる (また Garde 1976, §20 はこれを Illič-Svityč の法則と呼んでいる)。したがって、スラヴ祖語における a. p. a には語幹にアクセントの母音のある単語、a. p. b には語尾にアクセントのある単語が、また a. p. c には語幹に circumflex 音調をもつ、移動アクセントの単語が含まれている (Дыбо 1981: 18-19)。

単音節の名詞や単音節の語根の名詞を除いて、スロヴェンツ語における a. p. b の名詞はほとんどない。スロヴェンツ語の oxytone アクセントパラダイムがほとんど見られないのは、古風な現象 (Kuryłowicz, Garde) か、あるいはイノベーション (Stankiewicz) と見なされている (Bethin 1998: 160)。Lorentz (1903: 195) によれば、oxytone アクセントの名詞は少数存在する。若干の語根末が軟音で終わる女性名詞が a. p. b に含まれている。それは *ceñāy, cesñāy, cečāy, cqzāy, Gärñāy, glōybjāy, grābjāy, klōunāy, plōunāy, brāvjé* 等である。Lorentz (1903: 256) によれば、*ceñāy* (日陰) の名詞の曲用パラダイムは以下のようになる :

単数	主格	ceňá <u>u</u>	複数	主格	ceňé
	属格	ceňé		属格	ceňí
	与格	ceňí		与格	ceňó <u>um</u>
	対格	ceňó <u>u</u>		対格	ceňé
	具格	ceňó <u>u</u>		具格	ceňamí
	位格	ceňí		位格	ceňā <u>χ</u>
	呼格	—	双数形	主格-	ceňí
				対格	

Kuryłowicz (1952: 16) によれば、スロヴィンツ語の語尾アクセントが存在しないのは、最後の音節から前の長母音に、その後、前の短母音に後退した結果である。Garde (1976, §395) によると、その原因は、Dybo-Illič-Svityč の法則が働いていないからである^注。Kortlandt は Garde の意見に反対している (Kortlandt 1975: 35)。Kortlandt によると、初期のスロヴィンツ語では Dybo の法則が作用した。その証拠は a.p. *b* に含まれている *ceňáu* という名詞である (上の表を参照せよ)。また、Kortlandt によれば、西スラヴ語群における Dybo の法則が作用した間接的な確証は *můžes̄, vůle* (チェコ語)、*môžeš, vóla* (スロバキア語)、*stróža* (ポーランド語) という名詞であるという。その名詞は古くは、oxytone アクセントをもっていた (Kortlandt 1975: 37)。

Lorentz によって示された語尾の固定アクセントを受ける名詞は、スロヴィンツ語において a.p. *b* が存在したことの確かな証拠ではない。*-áu* 語尾及び語尾の前の軟子音は、この名詞の構造に *-bj-* 接尾辞が含まれていることを示している。*-bj-* 接尾辞は、派生語のアクセントの場所の再分配に影響した。例: *ceňáu* (日陰) ← **těńь +bj, cesňáu* (狭さ) ← **těskńь +bj, cečáu* (流れ) ← **tekti +bj, cąžáu* (重さ) ← **tęgnoti +bj, glóybǰáu* (深さ) ← **glybь +bj*. a.p. *b* の語根は保存されていない。それ故に、スロヴィンツ語において a.p. *b* は十分に機能していなかったようだ。従って、a.p. *b* は周辺的な現象であると見なされよう。

4.3. アクセントパラダイム *c*

Stang (1957: 62) は、スラヴ祖語の a.p. *c* をもつ、*ā-* 語幹名詞を次のように再建している:

golvá (nom. sg)	goľvy (nom. gen.)	goľvě (nom. dual)
golvý (gen.)	gólvь	golvù
goľvě (dat.)	golvá <u>mь</u>	golvá <u>ma</u>

^注 Bethin 1998: 160 参照。

gol'vɔ (acc.)	gol'vy
gol'vojɔ̀ (instr.)	gol'vǎmi
gol'vè (loc.)	gol'vǎxъ

スロヴェイツ語における a.p. c は以下のタイプである：

単数	主格	břég (岸)	vùɔl (雄牛)	rǎkǎ (手)	ziemjǎ (土)	gùɔsc (客)	
	属格	břégú	vùɔlá	rǎhī	ziemjǎ	gùɔscǎ	
	与格	břégú	vùɔlojù	rǎcǎ	ziemji	gùɔscù, -cojù, -cejù	
	对格	břég	vùɔlá	rǎkǎ	ziemjǎ	gùɔscǎ	
	具格	břéga	vùɔlǎ	rǎkòu	zemjòu	gùɔscǎ	
	位格	břégú	velú	rǎcǎ	ziemji	gùɔscǎ, goscú	
	呼格	—	vùɔlá	—	—	gùɔscù	
	複数	主格	břéhi	vùɔlevjǎ, -lá	rǎhī	ziemjǎ	gùɔscǎ
		属格	břégóu	velóu	rǎk, rǎkòu	zém, zemjòu	goscí, -còu
		与格	břégóum	vùɔlóum	rǎkóum	zemjòum	goscóum
对格		břéhi	vùɔlá	rǎhī	ziemjǎ	goscóu	
具格		břegamí	velamí, vùɔlmí	rǎkamí	zemjamí	goscímí, -camí	
位格		břéǵǎχ	velǎχ	rǎkǎχ	zemjǎχ	goscǎχ	
双数形		主格	břégǎ	vùɔlá	主格-对格: rǎcǎ 属格: rǎkú	主格-对格: ziemji	gùɔscǎ
		与格 - 具格	břégomǎ	vùɔlemǎ, vùɔlmǎ	rǎkòumǎ,	ziemjòumǎ	gùɔscmǎ, -comǎ, -cemǎ

スラヴ祖語と違って、スロヴェイツ語の a.p. c の名詞は、単数において語根固定アクセントになっている。*zemjòu* の具格形や *velú* の処格形は例外である。属格、与格、具格、位格の複数形は語尾アクセントが見られる。*goscóu* の複数対格形は語尾アクセントで、*břéǵǎχ* の複数位格形は語根アクセントである。

Kortlandt によれば、語尾アクセントの *břegamí, vĕlamí, řakamí, zemjamí* の具格形はイノベーションとして見られている (Kortlandt 1975: 35)。双数形式は語根アクセントである。

a.p. c の特徴は単語内部のアクセント移動だけではなく、前置詞や否定辞という後接語にもアクセントが後退することである。名詞から前置詞に後退したアクセントの例は、以下の参照：~~du~~-bratā, ~~du~~-čarovníkā, ~~du~~-kärčmarā, się-sóusadq, ~~du~~-bjälhī, zā-rĕbotq, vĕ-vozā, nā-lĕpacā, nā-pĕlā, nāt-pĕlq, vĕ-vimjq, nā-remjeňā, vĕ-vjĕš (Lorentz 1903: 223)。

5. 結論

スロヴィンツ語のアクセント体系は a.p. a と a.p. c のアクセントパラダイムに縮小している。a.p. b は、初期のスロヴィンツ語で語根から語尾に移動したアクセントの残存物である。そのような 2 類のアクセント体系は、スラヴ語群の中で特殊な体系であり、西スラヴ語群における昔の 3 種類のパラダイムの再分配の結果である。

音調はスロヴィンツ語の韻律論の特徴である。スロヴィンツ語の音調はスラヴ祖語に遡り、南スラヴ語群と同様な特徴をもつ。しかし、スロヴィンツ語の音調の本質はこれまでのところはっきり分かっていない。南スラヴ語群のピッチアクセントはスラヴ祖語のピッチアクセントの体系の残存物で、スロヴィンツ語のピッチアクセントは二次的な性質である、と推測できる。そのピッチアクセントはスラヴ祖語の分裂の後、つまりレヒト諸語の初期に起こった、と仮定できる。母音の長さは他の西スラヴ語群と異なっている。チェコ語やスロバキア語の長音は本来的にアクセントの無い音節にも見られるのに対して、スロヴィンツ語の長音は、南スラヴ語群と同様に、本来のアクセントの位置にある。長音は 3 モーラまたは 2 モーラの構造があったと仮定されている。

略号

Cz. チェコ語、Lith. リトアニア語、Russ. ロシア語、Sl. スラヴ祖語、a.p. アクセントパラダイム。

注

1 注 スロヴィンツ語のアキュートとリトアニア語のアキュートは、Mikkola

(1899: 44) によっても比較された。

参考文献

- Bethin C. Y. Slavic prosody. Language change and phonological theory. Cambridge: Cambridge University Press, 1998.
- Garde P. Histoire de l'accentuation slave. Tome premier. Paris: Institut d'études slaves, 1976.
- Kortlandt F. Slavic accentuation. A study in relative chronology. Lisse / Netherlands, 1975.
- Kuryłowicz J. Akcentuacja słowińska (pomorska). Rocznik Slawistyczny 17: 1-18. 1952.
- Lorentz F. Geschichte der pomoranischen (kaschubischen) Sprache. Berlin; Leipzig, 1925.
- Lorentz F. Slovinzische Grammatik. St. Petersburg, 1903.
- Lorentz F. Gramatyka pomorska. Zeszyt 1. Wstęp. Źródła. Trankrypcje. Z mapą narzeczy pomorskich (kaszubskich). Poznań, 1927.
- Mikkola J. Betonung und Quantität in den westslavischen Sprachen. W. Hagelstam, Helsingfors, 1899.
- Ramuł S. Słownik języka pomorskiego czyli kaszubskiego. Kraków, 1893.
- Stang C. Slavonic accentuation. Oslo, 1957.
- Бубрих Д. В. Северно-кашубская система ударения. Известия Отделения русского языка и словесности Российской академии наук, XXVII: 1 – 194. Ленинград, 1924.
- Булаховский Л. А. Акцентологический комментарий к польскому языку. В кн.: Избранные труды в пяти томах. Том 5. Славянская акцентология: сс. 7-87. Киев: Наукова думка, 1983.
- Гильфердинг А. Ф. О наречии померанских словинцев и кашубов. Известия Императорской академии наук по отделению русского языка и словесности 8, вып. 1: 41 – 56. Санкт-Петербург, 1859.
- Дуличенко А. Д. Кашубский язык, с. 383-403. В кн.: Языки мира: Славянские языки / РАН. Институт языкознания; Ред. колл.: А. М. Молдован, С. С. Скорвид, А. А. Кибрик и др. Москва: Академия, 2005.
- Дыбо В. А. Славянская акцентология. Опыт реконструкции системы акцентных

парадигм в праславянском. Москва: Наука, 1981.